



一般社団法人
近江鉄道線管理機構



近江鉄道

NEWS RELEASE

一般社団法人近江鉄道線管理機構
近江鉄道株式会社

2026 年 8 月 4 日

近江高校吹奏楽部へ使用済み鉄道レールを提供 —地域を走り続けた鉄道レールが、打楽器「アンビル」として再生へ—

一般社団法人近江鉄道線管理機構（所在地：滋賀県彦根市、代表理事：南川 喜代和、以下「近江鉄道線管理機構」）および近江鉄道株式会社（本社：滋賀県彦根市、代表取締役社長：藤井 高明、以下「近江鉄道」）は、近江高等学校（所在地：滋賀県彦根市、校長：伊東 洋、以下「近江高校」）吹奏楽部へ、役目を終えた鉄道レールを打楽器「アンビル」の部材として再利用できるよう加工し、提供しました。

提供した鉄道レールは計 3 本（長さ 30cm、20cm、15cm）で、近江鉄道線管理機構が保有する資産を吹奏楽用途に合わせて切断・研磨しました。

本取り組みは、地域を支えてきた鉄道資材を廃棄せず、地元高校生の活動に活用することで、音楽を通じた地域連携と資源の有効活用（サステナブルな取り組み）につなげるものです。

なお、近江鉄道線は 2024 年 4 月 1 日より公有民営方式による上下分離に移行し、近江鉄道が第二種鉄道事業者として列車の運行を担い、近江鉄道線管理機構は第三種鉄道事業者として鉄道レールを含む鉄道施設・車両の保有・管理を担っています。

詳細は、別紙のとおりです。



近江高校吹奏楽部へ提供した鉄道レール 3 本



鉄道レールを再利用し完成した「アンビル」

【別紙】

■本取り組みに至る経緯

本取り組みは、近江高校吹奏楽部顧問・樋口先生と近江鉄道社員の面会の場で、鉄道レールを切断した部材の提供について相談があったことをきっかけとして始まりました。

鉄道レールは摩耗などにより定期的に交換され、役目を終えます。しかし、鋼鉄製の鉄道レールは非常に頑丈で、叩くと驚くほど澄んだ美しい金属音が響くため、吹奏楽の世界では古くから「理想的なアンビル（金床）の代用品」として用いられてきました。

長年にわたり、地域のみなさまや近江高校の生徒のみなさまを乗せて走り続けてきた歴史ある鉄道レールが、その役割を終えた後も廃棄物ではなく、地元の高校生たちの手によって世界に一つの楽器へと生まれ変わる。そして今度は、音楽という形で再び地域に感動を響かせる一。このサステナブルで夢のあるストーリーに深く共感し、今回の提供に至りました。

■「アンビル」とは

アンビルは、中世から鍛冶場で使われてきた鋼鉄製の金床（かなとこ）が、19 世紀の産業革命期にオーケストラへ取り込まれ、楽器として用いられるようになった打楽器です。

舞台上に据えた重厚な鉄の塊を専用ハンマーで叩くと、鋭い金属音と美しい余韻が響き、楽曲のアクセントとして重要な役割を果たします。

本来は鍛冶用の金床を用いますが、その形状や材質の類似性、そして「極めて理想的で美しく鋭い響きが得られる」という音楽的理由から、吹奏楽の世界では古くから鉄道レールが最高峰のアンビルとして愛用されてきた歴史があります。クラシック作品のみならず、現代の吹奏楽作品でも数多くアンビルが指定されており、その効果は演奏に劇的なインパクトをもたらします。

■加工方法

近江高校吹奏楽部からご要望いただいた長さに合わせて鉄道レールを切断し、風合い・質感を残す範囲で表面を研磨しました。今回、大きさや長さの異なる複数サイズをご用意しています。サイズによって音色やピッチが異なるため、演奏する作品に合わせて『最高の音色』を選択できる構成になっています。

■今後の活用・お披露目の予定

完成したアンビルは、今後、近江高校吹奏楽部が出場するコンクールや定期演奏会などで活用される予定です。

【近江高校吹奏楽部からのコメント】

近江高等学校 吹奏楽部
顧問 樋口 心 先生

近江鉄道の方とお会いした際、「鉄道レールを切ったものをいただけませんか。」とお話したところ、まさかこんなに素晴らしい形で実現するとは夢にも思いませんでした。心から感謝申し上げます。

正確には、アンビルは鍛冶用の金床なので鉄道レールではありません。しかし、形状や材質が似ていることから、吹奏楽の世界では古くから鉄道レールが最高の楽器として愛用されてきた歴史があります。多くの吹奏楽作品でアンビルが指定されており、本校吹奏楽部もこれまでたくさんのお本番で使ってきました。

私たち近江高校と近江鉄道は、アルファベットで同じ『OHMI』というスペルを使う固い絆で結ばれています。近江の街を長年支え、走ってきたこの鉄道レールを叩き、文字通り『近江の音』を響かせながら、これからのコンクールや演奏会に全力で挑んでいきたいと思えます。